

地域	県	建築物名称 (旧名称)	設計者	竣工年	建物用途	解説
227	関東 東京	自由学園南沢キャンパス (門、初等部/食堂・教室、女子部/食堂・教室・回廊・体操館・講堂、男子部/教室・体操館)	遠藤新	1929-1943	教育施設	 南沢キャンパスは、遠藤新が羽仁先生との合作だと書き残すほど建学の精神を最も良く表した建築群である。東京都の武蔵野の雑木林の風景が残るひばりヶ丘から学園町までの美しい住宅街は、自由学園南沢キャンパスの存在によって成り立っているといっても過言ではない。キャンパス内の遠藤新による建築が作り出す環境は、地所の自然を捉えて人と自然を仲介する役割を遺憾無く果たしている。これは遠藤新の有機的思想の集大成であり、我が国における学校建築のなかでも一つの理想を実現させた重要な作品群と言える。
228	関東 東京	赤星鉄馬邸(現: ナミュール・ノートルダム修道女会東京修道院)	A. レーモンド	1934	住宅	 設計者のアントニン・レーモンドが当時の日本の文化や風土と調和する空間をインターナショナル・スタイルと融合させた赤星鉄馬邸は、戦前のアントニン・レーモンドの理念を体現した代表的な建築であるといえ、自らのスタイルを確立するための重要な役割を担った作品として評価できる。同時期のモダニズム建築は現存するものが少なく、このような大規模 鉄筋コンクリート造住宅建築が広大な敷地とともに残っていること自体、極めて稀である。加え、徹底されたデザインと高い技術により生み出された南面は同邸のハイライトの一つといえる。増改築や 改修により竣工時の姿から改変はなされているが、日本の文化や風土を取り入れ、徹底的にデザインを追求し辿り着いたこの建築は、現在においてもその価値を損なわない。歴代所有者により価値を保持されつつ時代を超えて住み続けられてきたことは、当初より備える居住性の高さを示すものとして特筆されると同時に、所有者の建築への向き合い方の重要性を再認識させる。また、激動の時代を謙虚かつ大胆に駆けた赤星鉄馬の数少ない遺産である。さらに、近隣地域の良好な環境形成の一要素として、地域住民が思いを寄せる存在として、近代地域形成史を象徴する文化財として、地域における重要性は増しているといえる。
229	中国 山口	岩国徴古館(現: 市立岩国徴古館)	佐藤武夫	1945	博物館	 戦前アーキテクトプロフェッサーとして活動していた時代の佐藤武夫が設計した、現存する数少ない作品である。戦時中の物資統制下で、小屋組は木造、躯体はコンクリートと煉瓦造の混構造を採用し、正面の列柱のポーチ、対称形の外観にドイツ古典主義の影響が見られる。外観や平面の様式的構成に対比して、東面では突出した曲面、鉦澤ブロックのやわらかなテクスチャー、内部陳列室のすそがりの柱などの表情豊かな感性的な意匠は、いかに佐藤武夫らしい格調高い作品である。
230	中国 島根	島根県庁周辺建築群(島根県立博物館・島根県庁舎・島根県民会館・島根県立図書館・島根県立武道館)	安田臣、菊竹清訓	1958-1970	公共施設群	 島根県庁周辺の建築群は、田部知事という稀代の名望家のもとで安田、菊竹の二人の優れた建築家が主要な建物の設計を手掛けた。実現こそしなかったが、超高層庁舎や地域冷暖房など当時の最先端技術の導入も検討されている。全体計画は中国地方建設局長の大塚全一、早大教授の武基雄、松井達夫ら都市計画の専門家と、地元行政関係者で構成される「島根県庁周辺整備計画委員会」が組織され、幅広く専門的意見を聴取しながら策定された。これらの結果、江戸期の城郭遺構と昭和のモダニズム建築が一体となって調和する稀有な景観が誕生している。島根県庁周辺整備計画の事例は、地方都市における再開発の一つの指針として高く評価され、翌1971年に日本建築学会賞(業績)が授与された。整備計画の理念は現在に至るまで県組織内で受け継がれ、県庁周辺の建築群が良好に維持保全されていることも評価に値する。
231	中部 富山	倉敷レイオン富山アパート (現: 岩瀬スポーツ公園庭球場管理棟)	浦辺鎮太郎(倉敷レイオン営繕部)	1961	社員寮	 倉敷レイオン富山アパートは、倉敷レイオンの社宅の一つとして建設されたもので、後に建築家として著名になる浦辺鎮太郎が営繕課の技師として設計に取り組んだものである。RC-60と名付けられたプロトタイプに基づいたもので、合理性や機能性を追求し、公共的な空間の充実も図りながら、一方で手作り感を出し 地域性の風土も考慮した設計になっている。室内の広さを確保するために特殊な構造技術を採用したり、ル・コルビュジェが考案したモデュールを日本的な寸法に置き換えたクラシ・モデュールを採用したりするなど、あらゆる点から工夫が凝らされており、その完成度も高い。戦後の日本における、企業の社宅あるいは寮として、技術性や社会性、文化・審美的、歴史的背景のあらゆる点において、高い価値を持っていると言える。また、現存するRC-60型のアパートは、この建物しか残されておらず、希少性も高い。したがって、DOCOMOMO Japanの選定作品として十分な価値を持つ。
232	中国 岡山	日生町庁舎(現: 備前市役所 日生総合支所)	山本久(K構造研究所大阪事務所)	1961	庁舎	 1955年、岡山県と気郡日生町と福河村合併により誕生した旧日生町の瀬戸内海の日生湾近くに立つ、地上2階建て 鉄筋コンクリート造の旧日生町庁舎である。建物は約43m×15mの長方形平面を持ち、長辺方向に3連のコンクリート打ち出しV字型形状の構造躯体と短辺方向は1つのV字型構造躯体で囲み、大きく四方に突き出した折版屋根スラブから構成されている。内部は、2階床スラブを外周の構造躯体が支える無柱空間で、独特な鳥籠構造である。建物の1階は住民窓口・事務部門と旧町長関係室、2階は会議室と議場が構成されている。道路に面した庁舎広場を広く取り、正面外観の左上に議場のトップサイドライトが屋根より飛び出している。現在は、備前市役所支所として1階の事務室と2階会議室が使用されている。1950年代後半から60年代にかけて、新しい鉄筋コンクリート造の建築が試みられた時代において、水平と垂直の柱と梁で構成されるラーメン構造と異なった幾何学的な造形は、日本のモダンデザインの公共建築が展開された時代における、歴史的な価値が高い作品として評価される。
233	九州 熊本	熊本大学学生会館 東光会館	野中卓	1965-1966	教育施設	 野中建築事務所は熊本県第1号の建築士事務所として設立され、現在に至るまで90年間、熊本県内に500件を超える建物を設計してきたが、熊本の気候や風土を知り尽くした事務所に「熊本の気候に適った工法である」との確信をもち、以後断続的に設計してきたHPシェル構造(貝殻構造)の建築の代表作が、本作である。野中建築事務所が設計した建物には、老朽化や道路拡張を理由に解体されたものも少なくないが、HPシェル構造の作品で解体されたものはわずかで、特に本作と同年に竣工した作品が全て、築55年を迎えた現在も竣工時と同じ用途で使われ続けている事実が、同事務所の確信が正しかったことを証明している。また、シェル屋根の支柱が並ぶ外観は端正かつ個性的で、建築に関心がない市民にもその独特な存在感が認識されている作品も多くあり、同事務所が長年地域に注ぎ続けている想いは確実に伝わっている。本作は、日本におけるモダン・ムーブメントの最盛期において、「風土は市民である建築家の心の中に溶け込んでいるわけで、それが本当の地方性であり、地方の建築は地方の設計者がやれるようになれば一番いい」と語っていた野中卓が、その想いを名実ともに実現した、地域オリジナルのデザイン・工法による渾身の作品であり、全国的にも貴重なものであるといえる。
234	東北 岩手	岩手県営体育館	日本大学小林美夫研究室	1967	体育施設	 建物中央を貫く2本のメインアーチと外周部のリングアーチ、さらに両アーチ間に吊り下げられたケーブルネットによる屋根面の生成という架構形式が内外にわたり独自の造形効果を示し、力感に富む空間が生み出されている。1970(昭和45)年に岩手県で開催された国民体育大会の基幹施設として設計され、スポーツ 振興を通じた地域社会の活性化という、戦後復興～経済成長期における地方自治体のニーズをその躍動感あふれる造形で象徴化した。また、シェル構造(貝殻構造)やサスペンション構造(吊り構造)などの特殊構造を用いて作品化されていった、空間構造を主たるテーマとする1960年代のモダニズム建築の新局面を代表する建築のひとつとして位置付けることができる。とくに、建築家と構造家の緊密な協働により新たな空間形式の発見と創造がなされていくのがこの時期の大きな特徴であり、この設計プロセスが本作品においても顕著に見られる。現在でも高い質の維持管理がなされ、一般市民に広く開放されて利用率も高く、地域に根差した公共建築としての優れた運用も特筆できる。
235	中部 新潟	長岡市立互尊文庫	日本図書館協会施設委員会(吉武泰水、他)	1967	図書館	 近代合理主義の一つの側面を追究した建築の学問領域として、ビルディングタイプごとに使う側の観点から建築設計の基本データを築き上げていった建築計画学があるであろう。戦後に誕生し発展した日本の建築計画学の対象として、比較的早い時代に取り組みされたのが図書館なるビルディングタイプである。この長岡市立互尊文庫は、それまで「書庫の延長」に過ぎなかった図書館を、「市民に貸し出す」ための器として、施設委員会の専門家たちが徹底して利用者の合理性を追求して当敷地に合う形で実施したプロトタイプ公共図書館である。しかも現存現役最古の施設委員会設計の市立図書館である。戦後民主主義によりもたらされた地方都市の市民のための公共建築を率直に平面・断面で表現した、日本におけるモダンムーブメントの一つの表れとして、たいへん注目し得る作品であり、長岡市民に愛されているというローカルな範囲だけでなく日本の公共図書館の歴史にとって非常に重要な作品である。
236	中部 愛知	蒲郡市民体育館(現: 蒲郡市民体育センター)	鶴田日夫(石本建築事務所)	1968	体育施設	 屋外空間的な市民の運動環境という設計者のコンセプトに基づき、吊り構造技術によってそれを 実現し建築造形にも昇華させる。モダニズムの考え方に沿って実現した模範的な事例である。また地方都市 蒲郡に地域の文化としてのアイデンティティをもたすことに貢献した事例として評価されるべきと考える。大きな改変を受けず当初の機能が維持され、今後も地元の意思による長寿命化改修によって建物を維持する決意が示されたことは、それ自体建物の価値を補強しているものと考えられる。
237	中部 愛知	大栄ビルディング(現: アーク栄東海ビル)	ポール・ルドルフ、山下司、納賀雄嗣	1973	商業施設	 ポール・ルドルフの作品としては小規模であるが、ダイナミックな構造と、都市環境に配慮した繊細さを併せ持つユニークな建築である。これは日本の教え子とのコラボレーションだからこそ実現したと言える。街路に開いたパブリックスペースの扱いは、21世紀の現在から見て有効なもので、商業建築の機軸と言えよう。日本のモダン・ムーブメントの流れの中に時折現れる西欧の巨匠の作品として、極めて貴重な建築である。
238	東北 青森	黒石ほるぷ子ども館	菊竹清訓	1975	図書館	 小さい規模であるがゆえ、菊竹清訓による細やかな配慮と地域文化や人々のコミュニティをリスペクトする思いが、合理的、経済的な建築法を使って、見事に表現されている建築だと評価できる。菊竹自身もこの小さな一粒の建物は、どこにも新しいところはないし、至極平凡な建築であり、野に埋もれ民家にまぎれて建ったにも関わらず、充実した気持ちに浸ることができたと言っている。おそらくその充実感は、子どものような純粋な心で遊び心を建築を、設計し工事する際に持つことができるのかによる。そのような意味で、この建築は、菊竹による建築の原初の姿を表しているかと評価することができる。